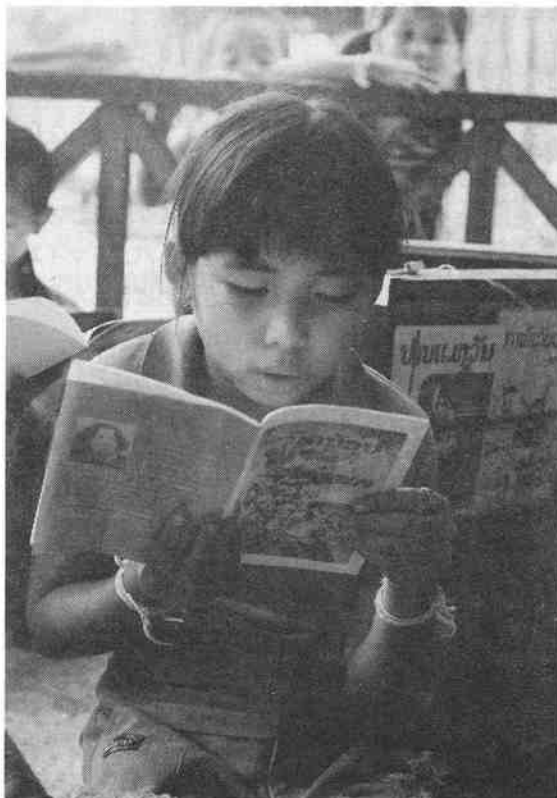


発行:ラオスの子供に絵本を送る会 〒143東京都大田区南馬込6-29-12ミキハイ7303 TEL/FAX03(3755)1603

ラオスの子供に絵本を送る会通信

第3号(1994年4月発行)



特集：1993年活動報告

この1年を終えて

この一年もラオスの子供に絵本を送る会にご支援いただき、どうもありがとうございました。

1993年は、さまざまな面で、会にとり新しい出発の年となりました。まずは、小さいながらも会の事務所スペースを持つことができたことです。これまでの間借りの定例会に別れを告げることができました。これにより、会を支えてくれる新しい若い仲間が増え、活動の安定化と活発化が図れ、大きな力となりました。

また、各種の書類、記録の保管もこれまでよりきちんとできるように

なり、支援の皆様に対する責任も、まだ不十分とはいえ、果たすことができるようになりました。会の通信を発行できるようになったのも、事務局の安定化の結果だといえます。

さらに、現地駐在員として、木口由香を一年の予定でヴィエンチャンへ派遣できたことも、会にとり新しい大きな経験でした。

このことは、これまでの活動の評価を行う上でたいへん有効であり、今後の活動を考えるためのさまざまな情報をもたらしています。後述しますように、移動図書館の持つ課題

について認識できたのもその成果といえましょう。なかでも、いちばんはっきりしたのは、まだまだラオスでは、子ども向けの本が絶望的に足りないということでした。図書館に入れたくとも、その本が無いという状況は、日本では想像ができないものです。

1994年度はその現実を踏まえ、現地でのラオス語の本の出版事業に活動の重点を置きたいと考えています。

これからも、皆様の暖かいご支援をよろしくお願いいたします。

チャンタソン インタヴォン

みつまめ遊戯団、公演ツアー

赤井 ^{あかし} 朱子

1993年8月、ラオス国内を北から南へ13か所、合計16回の公演を行った『みつまめ遊戯団』。絵本を送る会と日本人のバントマイム・アーティスト、音楽家、大学生、ラオスの情報文化省の担当官および現地の俳優が、約2週間にわたって寝食をともにし、村々をまわりました。

みつまめ遊戯団を乗せたバスが会場に到着すると、どこでも大勢の子どもたちが待っていた。昼過ぎに到着した一行を朝の8時ごろから待っていてくれた村もあった。野外ステージ前の客席用ベンチで、小雨の降るなかをちょこんと座って迎えてくれた子どもたちもいた。舞台などがないところでは、着いてから演技する場所を決めるときもあった。みつまめ遊戯団の発案者であり座長であるバントマイマーのあさぬまちずさんの指示で、ステージの場所が決まる。大きな木の下であったり、柱と屋根だけの船着場のこともあった。

ステージが決まると、楽器を出し、着替えをして、準備をする。ミュージシャンの森順治さんのリュックのなかからは、いろいろな楽器が出てくる。取り出すとき、音がちょっと鳴るたびに、「なんだろう」と、子どもたちの目がきらきらしてくる。準備をするうちに、どんどん人は集まってくる。毎回どんなところでも、どこから来るのだろうかと思ってしまうほど大勢の人が、もう入る隙間がないほどびっしりとつめかけて来てくれた。

最初の出し物は紙芝居。日本から作って持っていった『かぐや姫』の紙芝居を、ラオス語で声優のニャンさんとナーリーボンさんが語る。

初めは紙芝居という形式に慣れなかった二人だが、だんだんと慣れるにしたがって、自分たちで工夫していった。一人で読んでいたものを、

途中から二人で台詞を掛け合いながら進めていくようになった。この紙芝居は、みつまめ遊戯団という場で、日本人、ラオス人、さまざまな人の手を経ながら、徐々に仕上がっていったといえる。

紙芝居の次は行進。ときには緑の木々のなかから現れ、ときにはあふれかえった観客を押しわけながら現れた。太鼓を叩き、サクスを吹きながら楽しげに入場行進してきた三人組がステージの真中に来ると、音楽を止め、挨拶をする。あれっ？あさぬまさんが一人動いてないぞ！.. ..すでにあさぬまさんは、次の演技に移っていた。二人の森さんがいろいろやってもまったく動かなかったあさぬまさんは、音楽が鳴り出すと、それに合わせて動きだす。ぜんまい仕掛けの人形のような。あさぬまさんのバントマイムは、子どもたちの目を釘付けにする。子どもたちの顔からは好奇心という言葉があふれ出している。動きだした人形は、そんな子どもたちに近づいていき、握手を求める。子どもたちはびっくりしたのか、照れているのか、なかなか手を出してくれない。逃げてしまう子もいる。その横でぼかんと口を開けて見ている子もいる。

次に「朝」のバントマイムをするあさぬまさん。顔を洗い、歯磨きをする。観客からはどっと笑いが起きる。子どもたちは大喜びだ。あさぬまさんの後ろ側にいて、肩越しに子どもたちを見ていた私は、あさぬまさん

がどんな顔をしているのかわからない。あまりに楽しそうな子どもたちの顔を見ていると、思わず私も客席にいきたくなってしまった。最後に口紅を塗るバントマイムをすると、おじさんおばさんたちからもどっと笑いが起きた。

子どもたちはどんな小さなことも見逃すまいとするかのように、瞳を見開いてじっと見ている。『みつまめ』の旅では、たくさんの人々に出会うことができた。何百、何千という瞳は「なんだろう」「こんなの見たことない」「不思議だな」という思いを語ってくれた。笑顔にはさまざまなことばが刻まれていた。

締めくくりは、日本風の出し物である。「おかめとひょっこ」そして「すずめ踊り」。森透さんの和太鼓と、森順治さんの笛に合わせて踊りだす。最後にラオス語で「コブチャイライライ(どうもありがとう)」と挨拶をして公演を終わる。

....といっても、終わりと思ってているのは、実はこちら側だけ。手を振っても何をして、彼らは終わってくれない。その場を去ろうとはしないのだ。結局、子どもたちは「片付ける」という次の出し物もずって見て、私たちが去るのを見送る。

みつまめ遊戯団の背中と子どもたちを見てきて考えた。あのバントマイムの人形のぜんまいは、子どもたちの視線や歓声や笑顔によって巻かれていたのではないだろうか....

タケーク、図書館配付日誌

木口 由香

〔3月15日(火)〕

現地に持参する教科書、雑誌などを購入、梱包し、国立図書館、教育省のメンバーと、図書館車(本棚のついたマイクロバス)でカムアン県タケーク郡に向けて出発する。

〔3月16日(水)〕

現地午後4時着。途中パクサン郡までは道がいいが、そこからは建設工事の中をすり抜けての行程だった。タケークに近づくと、また道がよくなった。タケークは、メコン河近くの町。対岸はタイ。交易も盛んだ。

セミナーの1日目。図書館を受け渡す際には、図書館の使用法、本の修繕法、読み聞かせの講習などのセミナーを行うのである。

〔3月17日(木)〕

県の情報文化省の建物を訪問する。大きな2階建てで、博物館兼図書館として4年前に建てられたそうだ。図書館にあてられた部屋は5×20メートルほどで、広さは十分だったが、本は革命時のレーニンなどの政治関係の本が300冊ほどあるのみ。がらんと広い部屋にぼつんと棚が1つあるだけだった。

タケークには、最近出版されたラオス語の本はまったく届いておらず、町には本屋もないという。

ヴィエンチャンのようにタイ語の本はないかと聞いたところ、禁止しているわけではないが、入ってこない(または買ってくる人がいない)とのこと。門には「博物館」「図書館」と

いう立派な看板がかかっているが、白い布で覆いがしてある。

「タイなどからお客が来たとき、見せて欲しいと言われるが、建物の中に何もないので、恥ずかしいから隠しました」(現地の情報文化省関係者)

午前中、小学校を訪問。サーティ小学校では、セミナー講師による読み聞かせ、歌の実演。ジヨムジェーン小学校では、セミナー参加者による読み聞かせの実演を行う。

5年生の女の子3人にインタビューした(3人とも同じ答えだった)。

Q: 本は読んだことはある?

A: ある。

Q: タイ語の本を読んだことは?

A: ない。テレビはよく見る。

Q: 好きな番組は?

A: 中国映画。

Q: タイに行ったことは?

A: よく行く。

〔3月18日(金)〕

JICA(日本の国際協力事業団)がプロジェクトを行っているヒンブン郡カミンヤイ村(人口620人、135世帯、小学生170人、中学進学者10人)へ、図書館を持って訪問。道中、非常な悪路を2時間強かけての移動。ここに保健所のような施設ができるそうで、そこに図書館を置いてもらう予定。管理は村のヘルスワーカーが行うというので、使用法を説明した。すでにプロジェクトの運営などでレポートを書いたりしている経験のある人たちなので、図書貸出記録をつけることの意味をすぐに把握し



てくれた。図書館利用調査のレポートも期待できそうな手応えだった。

タケークは、対岸との交易で潤っている大きな町という印象を受けた。しかし今まで本はほとんど届いて折らず、ヴィエンチャンからの距離を感じる。村も、メコン沿いにあるところは、対岸のタイ側に野菜などを出荷しており、経済的に山岳部と比較すれば豊かである印象を受けた。タイからは日用品が届いているが、値段は高い。タイ語で話しかけてくる人もあり、テレビ、ラジオの影響の強さを感じた。

〔配付概要〕

- 配付地/カムアン県タケーク郡
- 配付先/小学校:50箱, 情報文化省:1箱, JICAプロジェクト地:8箱, タケーク女性同盟:1箱
- 参加者/教育省ブンイアン氏、国立図書館ラーソイさん、プービエンさん、情報文化省ソパー氏、図書館運転手ペット氏、木口由香

ラオスの現在、教育の状況と子どもたち

■タイと結ぶ橋の開通と新たな不安

1994年4月、メコン河をはさんで、タイ東北部のノンカイとラオスの首都ヴィエンチャン近郊とを結ぶ橋が開通しました。オーストラリアの援助でつくられたこの「ミタバブ(友好橋)」は、ラオスに様々な影響を与えることになりそうです。

現在、国内での産業が未成熟で日用品を輸入に頼り、タイよりも物価が高いのがラオス。この橋によって、タイからの経済の侵食に拍車がかかることは容易に想像できます。現に、93年になって、ヴィエンチャンの街は、外国資本による銀行、ホテル、ショッピングセンターの建設や、そのための用地買収が急速に進んでいます。西からはパーツ(タイ通貨)経済圏化が進み、東には経済再建が急速に進むベトナムがあり、ソ連の崩壊によって支援は消滅し、一方でメコン河流域の大規模開発が本格化しつつあるなかで、ラオスにとって経済的、文化的な自立がきわめて重要な課題となっています。

—— ラオスという国 ——

日本の本州ほどの広さ。人口約400万人。5割を占めるラオ族のほか、70余りの民族からなる多民族国家。内陸国で、大部分が山間部。首都ヴィエンチャンの年間平均気温は31度。雨季と乾季に分かれた熱帯モンスーン気候。ベトナム戦争終結の1975年に社会主義国に。主な産業は林業と水田や焼畑による米、コーヒーなど。工業は木材加工、水力発電などのみ。

■校舎も教科書も不足状態

ラオスの義務教育は5年制の小学校のみ。校舎は村の人々が負担して建てることになっており、経済的負担が大きく、学校を建てたくても建てられない、古くなった校舎も修理できないというのが現状です。

教科は、日本のように音楽、体育、図画工作といったものはありません。教科書や教材は教員分は教育委員会が用意しますが、子どもたちの分ではありません。そのため、自分でそろえるか、先生が黒板に書いたことだけに頼るということになります。現金収入の少ない親たちにとって、教科書やノートにかかる費用は大きな負担となっています。

■“兼業”先生で授業も不十分に

就学率は全国平均で、小学校就学時には90%程度と高いのですが、学年が上がるにつれて下がり、卒業時には30%程度に落ちこみます。これは主に経済的な理由により、教育費の負担、子どもたちが親の手伝いをしなければならないこと、そして教育に対する関心の薄さがあります。

今でも大人の識字率は50%程度で、田舎ではさらに下がります。町では子どもに留学させるために塾に通わせる人もいますが、田舎では教育を受けさせたからといって直接的なメリットがあるわけではありません。

教員は、小学校を卒業しただけの人がなることは少なくありません。給与は約2,000円で1週間の生活費程度。遅配や現物支給となることも頻繁にあります。そのためとくに地

方では農業や他の仕事をしながらの先生なので、授業も1日に2、3時間となってしまうのが実情です。

■全国に図書館1つ、書店2軒だけ

ラオスには日常生活の中で、本というものがほとんどありません。書店はヴィエンチャンに国営のものが1つ、そして最近、市場の中に1軒、英会話の本をおもに扱っている店ができたばかり。あとは雑貨屋に教科書が置いてある程度です。図書館は、やはりヴィエンチャンに国立図書館が1館あるのみです。ですから、作家という職業そのものが成り立ちにくく、意欲のある少数の人が赤字を承知で自費出版する程度です。ましてや児童書の作家となると、きわめて層が薄いというのが現状です。

■押し寄せるモノと子どもたち

橋の開通をラオスの文化的危機と受け止める人も少なくありません。現在もタイから流れるテレビ放送で目にする「豊かな」暮らしに若い世代は敏感に反応しています。欲しいものを手に入れるために、あるいは、自分たちの暮らしが価値が低いものと思ってしまうフラストレーションから、少年の犯罪が目につくようになったといわれます。橋からタイからの消費財が押し寄せ、この傾向に拍車がかかることは目に見えています。この4月にはヴィエンチャンにタイ資本のテレビ局も開局しました。

ラオス政府も、後述する「子ども文化センター」を発足させるなど、子どもたちの創造性を育てるための新たな取り組みを始めています。

活動報告

子どもたちに、本を読む楽しさを

ラオスの子供に絵本を送る会が、ささやかに誕生したのが1982年。子どもたちに絵本に親しんでもらいたいという気持ちから、日本の絵本を送ることからはじめました。そして文房具、スポーツ用品、楽器と様々なものを送り、小学校建設に協力してきました。

本は、子どもたち自身が使っていることばで書かれたものがいちばんです。母国語の本に親しみ、自分自身を自分のことばで表現できるようになって欲しいとの思いから、1989年より「絵本一冊運動」にとり組みました。そして1990年の国際識字年を機に、創作童話『びっくり星』(田島伸二・作)のラオス語版を2万部印刷し、小学校、中学校に無料配付しました。

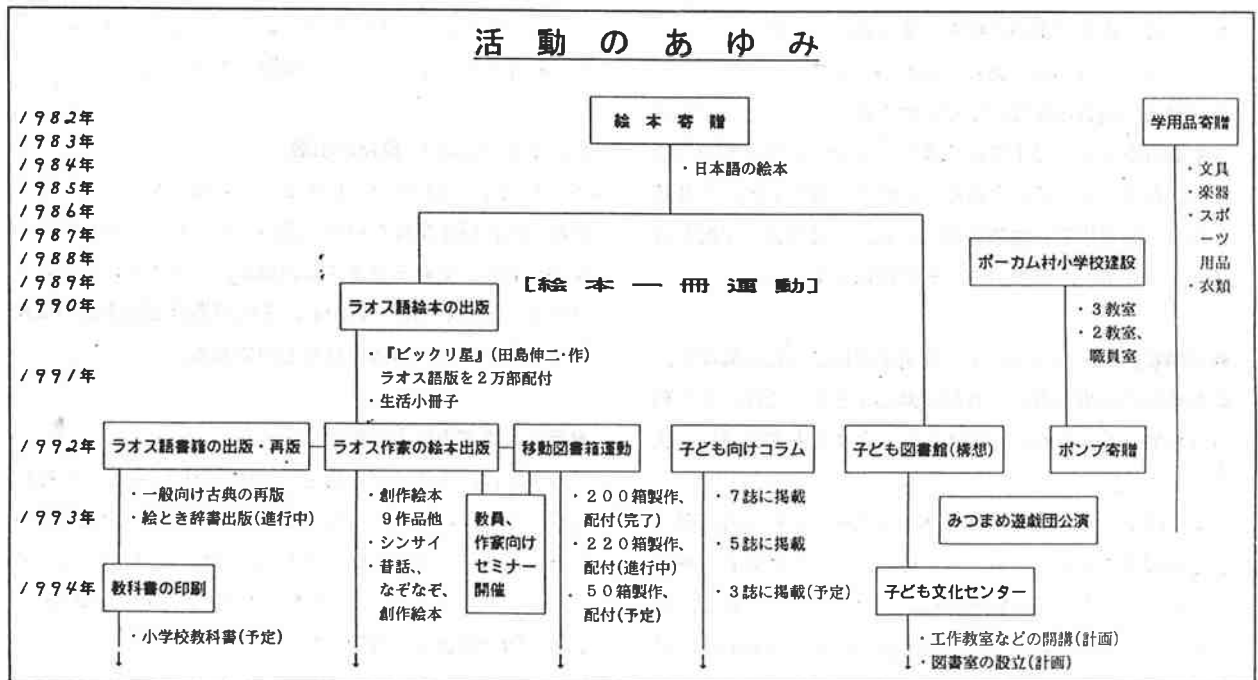
そして次のステップとしてラオス人作家による絵本の現地出版に着手し、1991年からは『生活小冊子』を、1992年からは創作絵本、昔話など9作品を各1万冊発行しました。

この間、ラオスでは「2000年までに、すべての小学校に図書館を」という国家プロジェクトとして、国立図書館主

導で「移動図書館プロジェクト」が行われており、会ではユニセフや先進諸国の政府や民間団体らと資金面での協力をするとともに、これら、会で独自に発行した絵本の提供をしてきました。

また、会が現地で図書館を開く子ども図書館を計画していましたが、ラオス政府による子ども文化センターに協力する形でこの構想を継承していくこととしました。

ラオスの子どもたちを見つめている私たちは、同じように自分たちの足元を見つめていきたいと思います。子どもが人間らしく成長するという点では、「豊か」であるどころかむしろ「貧困」なのが日本です。また、湾岸戦争のように人を殺すために政府が税金を使うことを許したり、アジアを日本の農園にして飽食を謳歌するという自分の生活を問うのでなければ、うその「支援」になってしまいます。私たちは私たちの活動と私たち自身の暮らしを結びつけて考えていきたいと思っています。



1993年度 活動総括

(1) 移動図書館運動

地方への図書普及を目的にユニセフが始めた、移動図書館の製作配布計画。これに賛同して始めたのが移動図書館運動。92年度200箱、本年度は120箱の図書館の製作を完了し、現在100箱が製作中である。会として、これまでに計420箱の移動図書館の製作を行ったことになる。

■製作 図書館製作はこれまで、ラオス国立図書館に依頼してきた。費用は国立図書館側の見積りに従い予算化してきたが、現地調査の結果、もう少し安くできる可能性があることが判明。配布までの保管状況に問題があることも判明したので、図書館に対して、より確実な管理を求めた。現在、配布、管理がしやすいよう布製の壁掛けスタイルの「図書袋」の試作を行っている。

■配布 図書館の配布は教育省の監督下で行われている。各地での配布は、ただ図書館を配るだけでなく、各学校で実際に本を読み聞かせするなど、読書の魅力のデモンストラーションをしながら行われている。

郵便の宅配制度はもとより、物流システムが全くないラオスでは、重い図書館を配布するために、必ずトラックをチャーターする必要があり、僻地の小学校では、何日間も象に乗って図書館を受け取りに来る教員に旅費の支給が必要であったりと、日本では想像ができないような配布活動が行われている。そのため配布にかかる費用も極めて高額となり、読書推進の啓蒙活動とともに、どのような配布方法がより効果的かを検討すべき時期にきている。

■利用状態 配布先により利用状態はまったく異なる。教育委員会の担当者や、教師が熱心なところでは、よく利用されている。しかし一般的には、必ずしも期待通りの状況ではない。

より利用を上げるために、寺院など村の中心施設に置くことが現地でも検討されたが、配布責任者が教育省であることから、配布先が学校関係に限られてしまっている。また図書館に入れられた本には大人向けのものもあるが、保

管場所が学校であるということが、十分に利用されない理由のひとつとなっている。

もっとも深刻なことは、子ども向けの絵本が絶対的に不足していること。種類も、数も足りないのので、配布先別に図書の内容を分けたり、よく利用しているところに新規の補充をすることができないのである。

■評価 図書館の形状そのものと配布先は検討を要する。

- 形状.... 重く配布に困難。しまうに便利すぎて、開けられないままにされることがある。
- 配布先... 地域により、本に対する理解に大きな差がある。
- 本..... 配布先のニーズと本の内容が必ずしも合わないことがある。入れる本の種類、数をもっと増やす必要がある。

図書館の受け入れ体制により利用度が異なる。図書館の利用を指導する先生自身が、読書経験がほとんどないのが現状だ。まず指導者への十分な啓蒙活動が不可欠。本の補充等配布後のフォローも必要である。

以上の事業には、郵政省ボランティア貯金、ユネスコ世界寺小屋運動、旧歩兵第85連隊の助成を受けてる。

(2) ラオス語絵本・書籍の出版

子ども向けの本が絶対的に不足しているラオスでは、本会の絵本の出版事業はたいへん期待されている。現在ラオス国内出で回っているラオス語の絵本、子ども向け図書は、せいぜい50種類ほどと言われ、その半数ほどは本会の援助により近年印刷、出版されたものである。

■ラオス作家の絵本出版

本年度は昨年度に引き続き、「ラオス作家協会」より提供を受けた、ラオス人作家によるラオス語絵本3作品『カムパー ゲンラム(孤児のゲンラム)』『ヴィエンペット(ヴィエンペット少女)』『メーオノイ(小猫)』、各10,000部を出版、国立図書館へ寄贈した。

■古典の編集印刷出版

国立図書館より、革命の混乱で消滅し、現在入手不能となっている古典文学の再版事業に対する援助要請があり、以下の本の出版につき協力した。

1. 『マホーソツ』賢いこどもの本 3,500部

中学高校で、教科書として使われたことがあり、2年前に再版されたが、厚く、解説が不十分で分かりにくかった。その内18話ほどを選び、言葉遣いを改め、50ページほどの挿し絵をかきおこした。現在印刷中。教科書の副読本としての利用が見込まれている。

2. 『ヴィエンチャン流』詩の書き方の本 2,000部

原本はタイ文字で書かれ、タイで印刷された。文学を教える先生たちが使う資料になるほか、大学生にも役立つ。

3. 『ケン ブロム』歴史の本 3,500部

ラオス人の王様伝説。約700年前、パイラーンに書かれた。1962年に印刷されている。1994年度の編集作業となる。

■絵とき辞書

ラオス作家ドゥアンドゥアン女史より、「子どもが使え
る辞書がなく、子どもたちは本の内容がよく分からないままに
読んでいます。それを改善するために挿し絵入り辞書の
編集を進めているので協力して欲しい」との要請があり、
完成までの編集費を援助した。現在、編集作業は65%ほど
終わっており、94年6月までには完了の予定。挿し絵は色
付きで作成している。

これらの事業は、郵政省ボランティア貯金の助成を受け
ている。

■その他のラオス語現地出版物

- 1 ナゾナゾ 『ベンニャン』再版 3,000部
- 2 『ことわざ集』再版 1,000部
- 3 『昔話集』再版 1,000部
- 4 絵本『カイ コンルアン』再版 1,000部
- 5 ドンドーク大学幼稚園向け絵本
『小りすはどこにいる?』新刊 3,000部
- 6 昔話『シンサイ』1,2巻 再版 2,000部

(3)子ども向けコラム

子供たちが文字に興味を持ち、表現する喜びを感じて欲しいとの意図から、2年間にわたり、雑誌、新聞に子ども向

けのお話しや、子どもの作文などを掲載するコーナーを設けてきた。今年度も前期は月刊文芸誌『ワナシン』月刊誌『ニヤワソン』、新聞『ヴィエンチャン マイ』女性同盟機関誌『ラオスの女性』教育省機関誌『スクサーマイ』の5誌にコラムを掲載した。

しかしながら、現地での評価、より効果的な援助の観点から、今後は『ニヤワソン』『ヌムラオ』、新しく発刊される子ども向け月刊誌『ワイデック』の3誌に限り掲載していく。

(4)有給スタッフの派遣

この11年間ラオスへの支援活動を続けてきたが、これまでは短期出張により現地活動の調整を行ってきた。しかしながら、時間的にも十分でなく、活動評価がほとんどできていないのが実情であった。そこで本年は、これまで現地にて行ってきた諸活動の評価をおこない、さらに本年度の事業を展開するために、はじめて現地駐在として木口由香を8月より1年の予定で派遣した。

その結果、ラオス現地でのニーズがより明確に東京に伝わるようになった。また移動図書館の実際の運用上の問題点、さらに改善策などが提案され、今後の会の活動を判断するに必要な情報を数多く得ることができた。

しかしその一方、専従者のいない東京の支援体制が不十分で、双方の意志疎通が十分でなく、認識のズレ、決定の遅れ、経済的な負担の増加など、多くの問題が生じ、今後の活動に課題を残した。

(5)ヴィエンチャン子ども図書館の開設

子どもたちが本に触れる機会を増やすとともに、子供達の反応を間近に知る目的で、ヴィエンチャン事務所を利用した「子ども図書館(児童文庫)」の開設を計画していた。しかし、地区自治会やヴィエンチャン特別市の許可が必要となり、調整に手間取っていたところへ、ラオス政府より、政府が計画している「子ども文化センター」の設立に協力要請が来たため、当面会独自の子ども図書館の開設は見合わせる事となった。

(6)絵本等の寄贈

日本からの絵本、文具等物資の送付については、その輸送費が多額になること、保管場所が確保しにくい等の理由から縮小の方向で進んでいるが、本年度はラオス国立図書

館、教育省に宛、1月と8月の2回、笹川平和財団の「国際平和輸送サービス支援」事業支援のもと、文具、本、ミシン等148箱の送付が行われた。現在ほとんどが地方に配布され、絵本の一部は国立図書館に寄贈された。また下中記念財団より3,115冊の動物の写真集をはじめとする新刊書の寄贈を受けた。現地駐在に対し、翻訳を付けて欲しいとの要請があるが、あまりに大量であるため、一部しか対応できないのが現実である。

今回も物資の集積にあたっては、ラオス人民民主共和国大使館にスペースの提供をいただいた。また別途小口輸送による送付も行われた。

(7)活動スタッフの派遣

■「みつめ遊戯団」公演旅行

パントマイム・アーティストのあさぬまちずこさんらとのジョイントで「みつめ遊戯団」を結成し、ラオスの俳優とともにラオス各地でマイムや、紙芝居の公演をおこなった。全国13か所を回り、各地で大歓迎を受け、3万人以上の人々が参加した。娯楽の少ない子どもたちにとり、はじめてのマイムと音楽、紙芝居の世界を味わうことができた。

この公演には、国際交流基金と国際教育交流馬場財団よりの支援をいただいている。

公演ルポ『みつめ遊戯団 LAO TOUR 1993』が、別途制作されているので、ご参照いただきたい。

■本年は、上記以外、3、4、12月に活動メンバーをプロジェクト管理、調整のため、延べ4名派遣した。

(8)国内活動

■機関誌の発刊

「ラオスの子供に絵本を送る会通信」として年4回の予定で、7月に創刊し1,200部を印刷した。しかしながら事務局の体制が充分でないため、年度内の第2号の発刊ができなかった。

皆さんに会の活動を知っていただき、積極的な支援をいただくためには、定期的な刊行にこぎつけるとともに、記事の内容を充実させる必要がある。

■ラオス正月パーティー

例年通り4月第3週に、皆さんに会の活動を報告するとともに、ラオスの食事を味わいながら、文化に触れていただく目的で「サバイディピーマイ」ラオスのお正月パーティー

を行った。

本年は東京ガス品川支社の全面的なご協力をいただき、約130名程のご参加のもと、4時間近くの良い時間を持つことができた。

■その他の広報活動

- ・3月 東京YMCA主催「NGOフェスティバル」
- ・7月 日本ユネスコ連盟主催「ユネスコNGOファクトリー」(東京・後楽園で開催)に参加。
- ・会の活動PR、報告のためチャンタソンが、出雲など各地に出張。
- ・大田区国際ボランティア貯金推進協会総会参加

■東京事務所

本年1月より、会の事務所スペースをはじめて持つことができた。机一つにTEL FAX コンピュータ 本棚の小さなスペースであるが、それまでから考えると、活動の上からは大きな進歩といえる。

事務拠点ができただことにより、月2回の定例会も定期的に関ることができ、メンバー間の意見交換、事務処理分担の明確化、問い合わせに対する責任ある対応等、活動の安定化に非常に寄与した。また新しい活動メンバーの受け入れも進んだ。

4月よりNGO活動推進センター(JANIC)の準会員となった。

野口賢一事務局長が仕事の都合から、日常活動に参加出来なくなり、夏より会の運営は、小沼、森、野口(朝)の合議を中心にしてすすめられた。

絵はがきの販売 広報活動が充分ではなく、絵はがき販売は低調であった。

本年度、会の運営に何らかの形でご協力いただいた方は、295名である。通信を刊行できたことにより、これまでよりも多くの方にご協力をいただくことができ、感謝である。

1993年度会計報告

1993年度は、例年に増して大口寄付をいただくことができ、用途の特定されていない、一般寄付の割合が多くなり、本年度現地へ派遣した駐在員に伴う経費、事務所開設費、スタッフ現地派遣費用とうに用いることができました。また、現地での要請に従い、活動計画で予定していた以上の絵本を、現地にて出版する事ができました。

このように、一般寄付の増加は、会の活動において、臨機応変の対応を可能とし、より効果的な活動を生みまします。

一方、用途の特定されている対プロジェクト寄付は、郵政省ボランティア貯金、日本ユネスコ連盟、立正佼正会、旧歩兵85連隊戦友会よりいただき、移動図書館運動、絵本出版事業、現地人件費などの目的で用いられました。収入合計は、昨年度より85万円ほど増加しました。

支出では、会の運営のための支出が増加しました。これは、会事務所を持つようになったことにもともない、コンピューターなどの備品を購入したこと、振込用紙、封筒などの消耗品を購入したことなどによります。

会の活動が活発に行われるためには、東京事務所の運営の安定化がどうしても必要です。とりわけ、事務局専従スタッフの確保は、避けることのできない課題となってきました。来年度は、予算的にも専従スタッフを前提に進めなくてはならないと考えております。

また、会の会計処理につきましても、素人なりにでも、徐々に、より内容の分かりやすいものとしていきたいと思っております。

■前期繰越金(1) 3,311,304円

■収入の部

| | |
|---------------------|-------------|
| ●一般寄付(258件)..... | 3,823,528円 |
| 大口寄付者(敬称略) | |
| 一吉証券株式会社 | 500,000円 |
| 南 康雄 | 500,000円 |
| 佐藤ふみ | 100,000円 |
| 田中トミ子 | 100,000円 |
| ●対プロジェクト寄付..... | 6,435,700円 |
| 郵政省ボランティア貯金 | 3,479,000円 |
| 日本ユネスコ協会 | 1,540,000円 |
| 立正佼成会 | 1,000,000円 |
| 歩兵85連隊戦友会 | 416,700円 |
| ●「みつまめ遊戯団」への寄付..... | 1,998,800円 |
| 国際交流基金 | 1,498,800円 |
| 国際教育交流馬場財団 | 500,000円 |
| ●その他の収入..... | 798,068円 |
| 書籍、絵はがきセット売上げ | 245,066円 |
| ラオス正月パーティ参加費 | 545,000円 |
| 雑収入(利息) | 8,002円 |
| 合 計(2) | 13,056,096円 |

■支出の部

| | |
|--------------------|-------------|
| ◆絵本一冊運動 | 5,570,624円 |
| ●移動図書館プロジェクト..... | 1,578,111円 |
| 移動図書館・製作費 | 1,171,188円 |
| 移動図書館・配付費 | 351,630円 |
| 配付関連雑費 | 39,069円 |
| フォローアップ・移動費 | 8,867円 |
| フォローアップ・書籍補充費 | 7,357円 |
| ●移動図書館用絵本の出版..... | 1,887,909円 |
| 3種(各10,000冊) | 1,006,993円 |
| 『シンサイ』1,2巻 | 210,000円 |
| 絵本 4種 | 409,500円 |
| 絵本出版援助 | 246,750円 |
| その他 | 14,666円 |
| ●セミナー..... | 438,446円 |
| ●出版プロジェクト..... | 319,725円 |
| 古典文学再版 | 95,550円 |
| 絵とき辞書 | 224,175円 |
| ●子ども向けコラム掲載..... | 341,250円 |
| ●ラオス出張費..... | 793,347円 |
| ●送金受取手数料..... | 201,991円 |
| ●雑費..... | 9,845円 |
| ◆「みつまめ遊戯団」 | 1,998,800円 |
| ●交通費..... | 1,498,800円 |
| ●現地活動費 | 382,500円 |
| ●小道具等制作費 | 93,000円 |
| ●通信費 | 24,500円 |
| ◆会の運営 | 3,041,094円 |
| ●東京事務所..... | 1,657,081円 |
| 家賃 | 200,000円 |
| 通信費 | 255,094円 |
| 運搬費 | 38,480円 |
| 交通費 | 17,720円 |
| 事務費 | 128,902円 |
| 機器購入 | 354,375円 |
| 印刷物制作費 | 350,409円 |
| 展示パネル制作費 | 45,000円 |
| 人件費(アルバイト) | 100,000円 |
| 交際費 | 37,557円 |
| 雑費(振込料等) | 129,544円 |
| ●ラオス事務所..... | 1,384,013円 |
| 開設のための備品費用 | 84,691円 |
| ラオス駐在員人件費 | 1,149,744円 |
| ラオス人スタッフ人件費 | 29,400円 |
| 家賃 | 63,073円 |
| 通信費 | 19,419円 |
| 水道光熱費 | 1,207円 |
| 旅費、出張費 | 7,023円 |
| 雑費 | 29,456円 |
| ◆その他 | 349,389円 |
| ●ラオス正月パーティの開催..... | 186,929円 |
| ●ラオス孤児院への寄付..... | 162,460円 |
| 合 計(3) | 10,959,907円 |

■次年度繰越金

(1) + (2) - (3) 5,407,493円

1994年活動計画

(1)「移動図書館」運動

昨年度製作した120箱と製作中の100箱を合わせ、今年度の配布を計画している。2、3月にカムアン県タケーク郡、サヤブリ県で120箱、現地駐在を中心としてセミナーを開催しながら配布を行う予定。残り100箱は在ラオNGO団体に託し、そのプロジェクト地に配布を行う計画で、NGOに対し配布希望と可能性の調査を行っていきたい。

また、これまで全国で配布してきた移動図書館について、本の補充が必要となっており、各県の教育委員会と連絡をとった上で、読書推進のためのセミナーを開催し、子どものみならず、大人、教育関係者の意識向上を計りつつ、本の補充を行ってゆきたい。

また、遠隔地への配布の際の軽量化を目的に開発した、布製で壁掛けとなる「図書袋」の配布も積極的にすすめ、現場での反応を探って行きたい。これは3段ポケットで60冊ほどの本が収納でき、一目ですべての本が見えるうえ、折りたためるため、配布効率を上げることができる。

これまでとかく盗難、破損を恐れるあまり鍵をかけ、しまい込まれるおそれが多かった図書館を、利用第一の観点から、より扱いやすくするねらいも込められている。

以上から今年度の移動図書館の製作は、これまでに比べ数量を減らし、今後の活動の展開に向けた準備、調査期間に当てたいと考えている。

(2)ラオス語絵本の出版

ラオス語で書かれた子ども向けの本の絶対的不足という現状にあって、図書館には、手に入る同じ本を数冊ずつ詰めてしのいでいる。しかし、これでは子どもたちに本への興味を持たせ、読書の習慣を身につけさせるという移動図書館運動の目的にはほど遠い。

そこで本年度は子ども向け図書・絵本の出版に活動の重点を置く。そうして、すでに図書館を配布した先にも、さまざまな種類の新規の本を積極的に補充していきたい。

これまでの実績もあり、このところ会に対しラオスの諸団体より、図書出版の援助要請が相次いでいる。これらの団体と協力し出版物を選択していく。その際、子どもが

昔話としてなじんでいる・挿し絵が美しい・大衆的に人気がある・古典としての価値が高いなどの基準で選択し、対象も幼児、子どもから、高校、大学生程度まで広げていきたい。全体として、出版部数を多くするより、種類を多くするように考えていく。

会の本の配布は、これまで地方を中心に行ってきた。そのため、都市部では希望しても入手できないという現状があった。そこで、これまで無償援助を前提に出版してきたが、次回からは無償配布にとどめず、有償による出版の拡大を図り、都市部の子どもたちも入手できる体制をめざしていく。

(3)ラオス子ども文化センター開設

ラオス政府は、94年に「子ども文化センター」をヴィエンチャンに開設する。会ではラオス政府の要請を受け、本年度より、その設立、運営に協力していく。

施設の半分はオーストラリア政府の援助によって情操教育施設として用いられ、会では残り4室での子ども図書館の運営を期待されている。施設は現在学校として用いられている教室で、当初、2階部分が提供される。

4室のうち、大きな1室を工作教室などに用い、1室を大人用読書室に、残り2室は間仕切を取り払い1室として、子ども用読書室、管理スペースとして用いることで計画が進んでいる。

当初3月からの開設の意向であったが、遅れ6月ぐらいのオープンとなりそうである。

(4)子ども向けコラム

本年度も引き続き、子どもたちが文字に興味を持つ機会を増やすとの観点から、月刊文芸誌『ニヤワソン』女性同盟機関誌『ヌムラオ』子ども向け月刊誌『ワイデック』にコラム掲載を予定している。

掲載する内容については、これまでは先方に企画を任せ てきたが、今後はこちらの意図をある程度反映させることをめざし、例えば、連載にして1年間でまとまりのある読み物としたり、あるいは東京から原稿を送り掲載してもら

うなどを検討している。

(5)現地駐在スタッフの派遣

昨年8月より現地駐在員を、初めてヴィエンチャンに派遣し、多くの成果を得ている。

その一方、専従スタッフのいない東京からの支援体制がどうしても不十分となり、迅速な活動の障害となっている。さらに会の現状では経済的な負担の増加が大きな問題であり、新たな現地駐在スタッフの派遣は困難であるとの結論に達した。そのことから、現地活動の方法も東京の判断のできるものに絞り込む方向で選択することとした。また不足分を補うためには、短期出張を増やす方向で対応したいと考えている。

(6)絵本等の寄贈

子ども文化センターの開設にあたり、日本からの寄贈に対し、「物語」の絵本より、ラオスではまだ出版することのできない子ども向け図鑑、科学読み物、写真集などをまとまった冊数で欲しいとの希望が寄せられている。文具等は現地での配布に困難があり、日本で現金化して送るのがもっとも効率が良いとの結論に達した。

(7)国内活動

ラオス現地での活動を活性化させるためには、日本国内での各種活動がもっとしっかりしていなければならないことが認識されてきた。その一つが自主財源の確保である。郵政省、日本ユネスコ連盟などよりいただいている寄付金は、現地でのプロジェクト費として使用目的が特定されており、東京での活動費、人件費、事務所運営費等への使途はなかなか認められない。十分な現地活動を行うには、東京での事務局体制の確立が不可欠であることを実感する昨今、プロジェクト経費ではない財源の確保が緊要となってきている。

そこで、会の活動への、より多くの皆さんからのご理解、ご支援をうるため、広報活動を充実させる必要がある。本年度は『通信』月刊の定期化とともに、内容の充実を計っていきたい。

また活動メンバーを強化し、各種フェスティバル等の行事にも積極的に参加していきたいと考えている。

(8)東京事務所運営

昨年度から、事務所を確保できたことにより、毎月第2日曜日午後1時より定例会、第4金曜日の世話人会が安定して開催できるようになってきた。

本年度はプロジェクト単位のリーダーを設け、責任の分担化を計るとともに、より積極的な活動に結び付けたいと考えている。

また、かねてからの懸案であった事務局長の一部有給化による、会活動の安定化にぜひとも取り組んでいきたいと考えている。



絵本の製本作業。



配布された移動図書箱。開くと、本棚になっている。